

武蔵野日曜集会

神の選び

――ロマ書第9章1～3節――

1996年7月7日

小池辰雄

詩『アッシジのフランチェスコ』 選びの器 アナテマ魂

【ロマ9:1～3】

1我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、2我に大なる憂あることと心に絶えざる痛あることを我が良心も聖霊によりて証す。3もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。

●詩『アッシジのフランチェスコ』

私はこのところ伊豆高原の山小屋で暮らしていたわけですが、そこで私はある一つの本を読んだ。それは中世初期のイタリアの傑物であるところの、アッシジのフランチェスコです。この人のことを読んで非常に感激しました。宗教改革者のマルティン・ルターよりか先に宗教改革をした人です。一般の人はよく知らないでしょうが、私はこの人のことを読んで、詩を書きましたので、読ませていただきます。いずれ発表するつもりですけれども。(詩『アッシジのフランチェスコ』。『霊界の星々』298頁以降参照)

アッシジのフランチェスコ

(1182頃～1226年)

或る巡礼者 門を叩いて

「もしもし。産婦が産室を去り

厩の片隅に藁を布き

そこに臥すれば嬰兒産まれん」

この不思議な勧告に従って

そのようにしたら男の子が生れた。

イエスの秣槽のような産れ方

これは事実か伝説か、疑うなかれ

選びの器に伝説めいた事実あり。



時は一一八二年春のこと

処^{ところ}はイタリア中部ス。ハジオ山麓のアッシジ

母の名はピカ

父はピエトロ・デイ・ベルナルドネ

織物商で貴族に次ぐ職柄。

母はこの児^こをジオヴァンニと名づけたが

旅から帰った父はフランス好きで

フランチェスコと改名させた。

母は気品あり敬虔^{けいけん}な魂^{たま}の人

公文書には、ドミニ即ち貴婦人呼ばわり、

フランチェスコの本質は母に通ずる。

当時のイタリア宗教界は低落腐敗。

さて青年フランチェスコは時代の潮^{うしほ}に

棹^{せう}さす舟の荒武者の如く

享樂の旗を掲げて遊蕩^{ゆうとう}三昧^{さんまい}

同類の無頼^{むらい}の徒の旗頭^{はたがしら}然として

金をばら撒^まく親分^{おやぶん}はだの俠客^{きやく}よ

不幸の徒を一瞥^{いちべつ}するや持てる金銭^{かね}を

残らず与えてしまう奴^{やつこ}

檻樓^{ぼろ}を纏^{まと}つ者あらば、惜^おし気^げなく

おのが美服を脱いでやり

そのぼろを自分が着るといふ

聖者のひらめきある男

一見放蕩^{ほうとう}ながらこの息子に

マドンナ・ピカは大度^{たいど}の美質^{びしつ}を洞察^{とんさつ}。

わが子の行く末を期待して

「妾^{わたし}はあの子に希望^{のぞみ}をかけています

祈りの中で神の愛顧^{あいこ}を聴きました」

……………(中略)……………

再び熱病に囚われ床^ふに臥^ふすや天来^{てんらい}の声あり

「フランチェスコよ

汝^{なんじ}は何処^{いずこ}へ行くや。

我^{しゅ}は主^{つかい}の使^{つかい}なり。

汝は虚しき者に仕うべからず
汝は主の僕となるべき者ぞ！」

「主の僕に。然らば我は何をなすべきか」

「汝速かに故郷に還れ

其処にて啓示を受けよ」

み使の姿は消えた。この神秘的な訪れに

彼のアプリアへの志は挫かれ

飛ぶが如く帰った。

彼は郊外の森や洞窟で黙想し祈った。

彼は終に旧き生活を断ち切るべく

宴席を催した。

……………(中略)……………

「酒宴の王者はどこに居る

おい！ フランチェスコ

馬鹿に消気じゃないか、

ハハア、恋の捕虜になったのか……」

「そつだよ、気高い純潔な

乙女を貰おうと思ってる」

この告白の内実は友らには全然わからない。

彼はもう世の属ではないのだ

彼は彼を創造り給いし聖者に全托

彼と友らの間には

超ゆべからざる溝ができた。

噫、フランチェスコは今や

新しき船出の解纜！

旧き我及び友らとの絆は断ち切られた。

光栄ある約束をもつ孤舟(この船出と相成った。

アッシジの郊外ガルチエリ(Garcia)洞窟に

彼は瞑想と祈りに赴くのであった。

マタイ福音書十三章四十四の天国の宝に

因んで彼は相対界の儂き物を棄て

絶対界の無一物無尽蔵を追求した。

神との靈交に没入した。

天来の靈油れいゆが灑そそかれ

マリヤからの愛の火が点った。

「静しずけき祈いのちりの時ときはいと楽たのし」の讚さん歌かを

そのまま彼は味あじわつていた。

父ちちなる神かみに祈いのち入いれして神かみ人ひと合あ一いつの心こころ境ぎょう

地上ちじやうの相あ対たい界がいのどん底ぞこの無む私しなる彼かれ

聖せい意い体たい現げんが彼かれの全ぜん念ねん願げん

詩し篇へんの祈いのちりがそのままおのが祈いのちりなりとなる。

新しん約やくのキきリりスすトとの心こころが彼かれの心こころに沁しみ込こむ。

貧ひんししきき者者、虐しらげたられた者者

侮あられた者者、ひとに棄あてられた可かわ哀い相そうな人ひと

悲かなしむ人ひと、悩なやむ人ひと、そういう人ひと々々と

同どうじじどどん底ぞこに自みづか分かを置おいて

助たすけることことが本ほん当とうの愛あい。

彼かれの胸むねはここの愛あいに燃もえて

具ぐ体たい的てきな愛あいを体たい現げん、身み証しょうせんと

燃もえてやまぬフふラらンんチちエえスすコこでああつた。

彼かれのは所い謂わ信しん仰やうではなく

正ただに神しん交こう、神かみとの靈れい交こうが彼かれの現げん実じつだ。

……………(中略)……………

十月一日、彼は死期しきの迫せまりを感か知ちし

兄あ弟ていたちにおのが身みを大だい地ちに置おかしめた。

彼かれは裸はだか形かたちとななつて大だい地ちに跪ひざまずいた

これは淑しよ女にょ「聖せい貧ひん」に抱いだかれんため。

二十余年「聖せい貧ひん」と一いつつにななつて

今日けふを迎むかえた

今いまや彼かれ女にょに抱いだかれて

父ちちのみもとに還かえらんとする。

「我われは為なすべきを果はたせり」

と並ならみ居いる弟てい子しらに言いい

彼かれらを祝いわ福ふくして横おう臥がした。

彼かれの願ねがひの如ごとく彼かれらは「太たい陽やう讚さん歌か」を歌うつた。

彼かれも微かすかな声こゑで唱な和わした。歌うたい終はると

詩し篇へん百ひゃく四し十じゆ二に篇へんを口くち吟ぎんんだ。



「レオよ、灰をわしの体に撒まいておくれ
間もなくわしの体は灰と塵ちりになる……」

おお、神さまの恵み

聖霊の交わり、キリストの愛

遺のこれるこれらの子らの上に、アーメン

私は召よされる……おお、天のみ使が……」

雲雀ひばりの一群が飛来した

彼の霊を迎えに来て囀さえずっていた。

時に一二二六年十月三日、秋の夕暮。

かくて四十五年の地上の生涯を

神愛に生きたアッシジの聖者は

聖国みくにへ召よされた。

爾来じゆい、彼の霊は彼を慕したつ

無数の人々と共に生きている。

● 選びの器

ローマ書9章に入ります。

「我キリストに在りて真まことをいい虚偽いつわりを言わず、²我に大なる憂うれいあることと
心に絶えざる痛いたみあることとを我が良心も聖霊によりて証す。³もし我が兄弟
わが骨肉の為にならんには、我みずから詛のろわれてキリストに棄てらるるも亦
ねがう所なり。

この節は非常に素晴らしい言葉です。

「兄弟が救われるためには、自分はキリストに呪のろわれて、捨てられてもいいんだ」
と。「詛のろう」というのはギリシア語で「アナテマ」という。呪のろわれ魂を「アナテマ魂」という。
このアナテマ魂のパウロはさすがです。信仰の幅、深さ、弾力性のあること、これはパウ
ロが一番です。パウロ書翰はよく読むといい。ヨハネがなくても、パウロがないと、新約
聖書は力がなくなってしまう。やはり、始めはキリストに逆らっていたサウロがひっくり
返ると、自然に信じた人よりもつと凄あさましい現実になる。パウロは選びの器であるし、フラ
ンチエスコも正に選びの器です。選ばれるということは、その人を使つて本当の天来の福
音を人々に伝えるために選ばれるのであって、その人がいい悪いのというのではない。
誰でもが選ばれる。神さまの御用にたつためには、その人の良し悪し、知識があるない、
そんなことは問題でない。ペテロが自分のことを

「無学ただひとの凡人」

と言つたでしょ。どれだけ聖書を読んだとか、そんなことではない。あなた方一人一人は



みな選びの器ですから。その選びは非常な責任と光栄がある。だから、天国に、地上を去って次の世界に往くときに、男でも女でも老いたるも若きも、そういった意味の棄身の伝道をしたかしないかで、天国往きにすぐになるか、「ちよつと待て」と言われるか、決まるんです。ミルトンがあるところであらう、そういうことを書いています。自分は天国に行けると思っただが、天の使いが、

「ちよつと待て！」

と言われる。「ちよつと待て」と言われるようではだめなんだ。私が育った無教会では、「信仰、信仰」と言って、しょつちゅう信仰が問題とされた。

「行為ではない、信仰が大事だ」

と。信仰がサムシング（何ものか）になつたら、またこれはだめなんです。

「私は信仰も何もありません。ただ圧倒されているだけです。キリストの愛の力に圧倒されているだけで、私は自分の信仰なんて、そんなものは何もありません」

と。これが本当の答です。

「信仰がどうかこうだ、行為がどうかこうだ」

と、そんなことを考えているような、そんな相対的な世界ではない。正に「無者」なんです。何も無い。人にどう言われようと、どう評価されようと、そんなことは問題ではない。

「ただ私はキリストに圧倒されて、キリストの御力が現れているだけの話です」

というのが、本当の僕なんだ。そうでないと本当の力がこない。自分を何かと思ったり、自分を省みたりしていたのでは。そんなものはどうだっていい。相対的なものは問題にならない。

「ただキリストに圧倒されて、どうにもなりません。ありがたくてしようがありません」

せん。力が来てしようがありません」

と、そういうしようがない世界なんです。

止むに止まれずということ。止むに止まれざるところの、そういった在り方が一番本当です。ヒルテイーがそう言っています。西郷南洲というのもそういった質の魂の人だったね。そういう意味で、私は南洲というのは好きだ。南洲というのは凄い。

●アナテマ魂

ローマ書に戻ります。

1 我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、² 我に大なる憂あることと心に絶えざる痛あることを我が良心も聖霊によりて証す。³ もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。

この3節、ローマ書9章の焦点は1〜3節です。



「自分なんかどうなったっていい、彼らが救われることが自分の悲願だ。キリストに棄てらるるも亦ねがう所なり」

という。我々の救は、人を救わんがための救です。救われてあとはノホホンなんて、そんなものは救でも何でもない。

「私は何もありません。圧倒おぼろされているだけです」といのが一番強い。

「あなたは信仰を何年やってますか？」

「何年か、そんなことは知りません。非連続の連続で、圧倒おぼろされているだけです」

と、それでいいんだ。そうすると、力が来てしようがない、光が来てしようがない、生命が来てしようがない、愛が来てしようがない。そういうし、ようがない、人間に段々されてしまう。

人がどう評価しようが、どう思われようが、どうけなされようが、そんなことは全部問題ではない。佐久間象山はそういう人でした。象山の記念館に行つて、私はやはり感激した。ああいう記念館に行つて、ただ、

「象山というのはいかような人だ」

ではだめなんだ。

「自分も象山に負けないだけの質になるぞ」

と、そういったように見る人が本当に象山を見る人なんだ。象山に限らず、そうです。上野に西郷隆盛の銅像がある。そうしたら、西郷隆盛に負けないだけの、そういった気持ちが出てこなければ、西郷さんも喜ばない。吉田松陰も凄やまといね。

「身はたとひ武蔵の野辺に朽くちぬとも留置とどめおかまし大和魂やまと」

という辞世の句がある。

本当に棄身で生きた人は死なないです。死んでも死なない。永遠の生命というのはそういう質のものだ。あなた方自身も全的に棄身で生きると、それはもうキリストは天国の素晴らしい所に連れていつてくださる。もう地上において、天国を頂いていなければだめです。

「天国は汝らのうちにあり」

という。ローマ書9章1節から3節は凄やまといね。

「呪のろまれて一向差し支えない」

という魂をアナテマ魂アナテマという。ローマ書9章はこの3節だけでいい。みんなの救のためには自分はどうなつてもいい、キリストに捨てられてもいいと。このパウロの9章3節だけでたくさんだ

